

## ペテン師稔典

### 西をさむ

保育園で園児たちが塗り絵をしました。一人の園児は太陽を赤く、雲を白く、空は黒く塗りました。そこに先生が近付いて来て「あら、お空は黒じゃなくて青でしょう？」と言いました。「ここにあか、しろ、あおと書いてあるでしょ。ああ、まだ字が読めないのね」「わたし、よめるよ。あか、しろ、あお」「だったらお空は青でしょ」「せんせい、よるのおそらはどうなの。くろくないの？そしてね、おそらのむこうはまっくらだって、わかたこういちさんがいったよ」。この子は、先生の顔に泥を塗って、先生を青ざめさせたのでした。

何処かの国の総理大臣が言いました。「不断の見直し」と。この国では原子炉が壊れ、社会保障と税の一体改革と言って消費税を上げるそうです。「不断の見直し」、この言葉は一国の総理大臣が考え付いた物とは思えません。こう言う職業に平生から就いて居て功利に長けた文才の無い人物が国民を煙に巻く為に考え出した言葉です。

分析してみましよう。きっぱりと物を言ってる様に見えますが、錯覚です。「不」と言う字は否定詞です。即ち不断とは絶え間の無い事、平常、決断の鈍い事を言います。さて元に戻って「不断の見直し」とは、「絶え間の無い見直し、平常の見直し、決断の鈍い見直し」と成ります。此れに「する、しない」を付け加えるとします。如何でしょう。するの方は全く問題外です。では、しないの方は反対だから良さそうですが、しょっちゅうでは無いが、見直しはしますよと言って居るのです。抜け目なく旨く考えたものです。

三月の甘納豆のうふふふふ

坪内稔典

たんぽぽのぽぽのあたりが火事ですよ

稔典

何だかこう言われてみると、其の様に思えて来ます。「不断の見直し」と比べてください。何の悪意もありません。是と非を緋い交ぜにして人を小馬鹿にした様な所がありません。純真無垢です。でもやっぱり変ですね。四十にしてまだごんたの坪内稔典さん、貴方はペテン師かもしれません。

水中の河馬が燃えます牡丹雪

稔典

桜散るあなたも河馬になりなさい

稔典

みんなして春の河馬まで行きましょう

稔典

朝からあんパンを食べる稔典さんの河馬好きは有名です。これらを読んだ時、又ペテンに引っ掛かったと思ったでしょう。でも本人は大真面目で河馬と向き合っているのです。そして、これ等の句に辿り着いたのです。

ここで河馬と何べんも繰り返し言ってみてください。そうら、河馬が馬鹿に成りましたね。ここから先は何も言いません。皆さんの想像にお任せします。

前出の五句をもう一度読み返してください。如何でしたか。滑らかに読めたでしょうか。やっぱり俳句にはリズムが欠かせないと言う事です。ここでその例を。来年の正月には、このリズムで薺を打って見て下さい。

せりなずなごぎょうはこべら母縮む 稔典

ほとけのぞすずなすずしろ父ちびる 稔典

うらじろや夫婦そろってちびります をさむ

念の為に言っておきますが、ちびるのは小便では有りません。ま、私の句の場合は小便の方が良いかもしれませんが。

参考文献 講談社 「新日本大歳時記」